

とも可能であるかも知れない。しかし、具体的にそれは不可能である。それでは、どう云う社会学的形態を教会はとるべきかは、未だに解決されない課題として残されている。

(ケン・ジョーンズ、竹中正夫訳)

Horst Symanowski; The Christian Witness in
an Industrial Society,
The Westminster Press, 1964, pp. 160.

宣教百年と云う日本のプロテスタント教会も20世紀後半に至って型にはまった宣教方式や、分散化した伝道の努力ではとても変動する社会に存在してキリストの身体たる本質を十分に発揮するには不可能と云う自覚を持ち出した。「宣教の為の共働」といったエキュメニカル的表現も日本に於ては、実質的に取組まざるを得ない課題なのである。日本キリスト教団は創立25周年を迎え、始めて「明日の教団」と云ったいささか時代がかった標語を掲げ新しい進展をめざしているのである。教会が直面している社会情勢と現代の人間の問題は、歴史的教会の総合的改革とキリスト者1人1人の確固たる信仰の再確認なくして取扱える如き簡単なものでない。

都市産業化の波と共に世俗化はあらゆる分野に及んでいる。その中で教会があたかも自己保存と自己中心主義の虜になっていると云う悲劇を感じる。しかしキリスト教の神は絶えず働き、絶えず前進する神であり、どの様な歴史的段階に於ても証人なしではおられないとパウロが語っている。日本の教会も然りである。最近教団伝道委員会の戸村政博氏が「福音と世界」に「今日に於ける宣教の使命」と云うルポルタージュを書かれているが、新しい宣教の形態が日本に土着化したキリスト教信仰に基づいてあらわれて来ていることは真に喜ばしい事である。

更に現代における宣教の使命を考えるとこれを世界という単位で考えざるを得ない時点に来ている事を感じる。福音の土着化が叫ばれることは、その世界的普遍性を認識する事にも通じる。民衆の日常言葉を通して表現される福音と、人間という共通の基盤を貫いて何処の誰れにでも通じる「言葉」による福音の伝達。この二つを通してイエス・キリストのミッションが我々のミッションとなり得るものと私は思うのである。

その意味で、ホースト・シマノフスキー氏の書は興味深い種々な刺戟を与えてくれる。

マインツ・カステルはライン川に添ったドイツの産業都市で、この地方はカトリック教会が強く、中世紀にはマインツの大主教は大変な勢力を持っていたと云われる。今年五十六才になるシマノフスキー牧師が伝統あるゴズナー・ミッションに派遣されたのは戦争のまっただなかの1943年であった。この宣教団の働きの場としてマインツ・カステルの地にシマノフスキーがゴズナー・ハウスを設立したのが1949年。それ以来シマノフスキー自身は1週間の大半は臨時雇いとして工場で働きながら労働者への牧会につとめてきたのである。

マインツ・カステルには化学、セメント、製紙と三つの大きな工場があるが、シマノフス

キーが痛切に感じたのは、教会と労働者の分離であった。これはこの書の英訳者であるスターバック氏が序文に記している。キリスト教信仰が働く人の日々の生活の原動力としての力を失ないつつあると感じたシマノフスキーは様々な伝道方式を用いた。「家の教会」も「日曜集会」も「工場に於ける教会的奉仕の為のセミナー」もそうであった。

「日曜集会」と云うのは決して日曜礼拝にとつかわるものでなく、又毎日曜もたれるものでもない。徹底した準備に基づいて1カ月1度行なわれる。分析してみると家の教会を拡大したようなものだが、時には100人も120人も集まる。朝の11時に始まり日常の重要な問題と信仰のかかわりあい課題として語り合い昼食を共にし、午後2時には終る。話はずめば、2時に解散するとはさまらない。昼食もスープにパンといった簡単なもので自由献金でまかなう。

序文でシマノフスキーとゴズナー・ミッションの働きとを紹介しているロバート・スターバック氏が語っている如く今日の教会が迫られているのは真の意味でのくいやらめと、革新であり、現代の世俗社会で奉えるものになる意義と方法の発見なのである(P. 14)。

この探究の中で生れて来たのが、ゴズナー・ハウスであり、その目的は教会から疎遠になった産業労働者達に対する牧会であり現代の情勢に適した方法と方策による伝道なのである。そしてその根底にある理念はドイツ語で云う *Gesellschaftliche Diakonie* でありその業に参加すると云う事は「復活された主としてこの世に在れるキリストの協力者として具体的に人間性回復の仕事にたずさわる」事なのである。

本書はシマノフスキー氏の論文、説教、レポートやラジオ放送の原稿を集めたものである。読者にとってそこに統一された神学や伝道論といったものは見出しにくい現代社会の最前線に伝道せんとする者の悩みと問題意識が明確に感じられ神学的洞察の糸口を発見する事が出来る。

いわゆる今日の伝道のフロンティアにある人々はそのたまたまの中で時間をはぶき、目を閉じて、その意味と意義を考えそれに関連した伝道論や方針方を組織だてると云う事が少いのである。しかし都市伝道や労働者伝道といった現代教会の最前線にいるもの達がキリスト教信仰の柱になるものを厳しく検討してそれに創造的貢献をする事がきわめて重要なのである。かような面で戸村氏の記事、平田・金井牧師の書かれたものは教会体質改善に特に価値があるのである。

又、同じ意味でシマノフスキーの論文中、第1章、*The Church-estranged Man in the Industrial World*. 第2章、*The Church and Work* は興味深いものであると同時に、シマノフスキーの文化・社会的背景、即ちヨーロッパ、キリスト教的地盤が故に、私達日本のキリスト者にとっては、もの足りない感がある。例えば、*estrange* と云う英語は「神からあるいは教会から疎遠になった人間」を意味する。もともと神と共にいた人が前提となっている。しかるに日本の場合、産業労働者にしても始めからキリストの神とは全く無関係に生き、存在して来た。それ故「疎遠になった」の語は妥当でない。

第5章「講壇なき会衆」。第6章「壁なき会衆」は各々深い考察と云い難いが、適格な表現で現代教会のマンネリ化を鋭く追求している。

この種の書は他に、シェフィールドで働いていたウィッカム監督の「Church and People in an Industrial City」1957 や、イースト・ハーラムのウェパー牧師による「God's Colony in Man's World」1960 がある。

我々は最近の神学書を読むのと同時に、このような書物からも、現代社会にあって、生き生きとした伝道者となり、活氣的働きをする刺戟が得られるものと思うのである。

(深田未来生)

竹中正夫編「聖書のことば」(現代日本美術とともに)

創元社版, 昭和41年12月, 定価 700 円

本書は現代日本人の美術家の手になる芸術作品によって解釈されている聖書の百の言葉を集めたもので、それは著者による短い説教を芸術的に例証する絵画や彫刻や生花等を集めたものと見る事ができるし、また逆に日本人の美術家による百の聖句の解釈と見こともできる。言わば聖書と芸術との結びつきについての我国における新しい試みであって、この意味において著者は新生面を開かれたと云うことができよう。著者は「はしがき」において、この聖書と芸術の結びつきという試みは「いままであまり開拓されていなかった」と言う。「それは一つには、この国のキリスト教の伝統の浅さを示すものであるし、また、いままでに日本のキリスト教会が、日本の文化との対話を十分に支持、理解して来なかったあらわれであるかと思う。その点からこの書物のおわりに、宗教、とくにキリスト教と芸術の関係についての拙い小論を加えることにした」と述べている。故に本書は単に図版とそれに対応する聖句やその解釈を並列しただけではなく、全体の基盤を形成している「キリスト教と芸術の関係」についての著者の理論も展開されている訳である。著者によれば、聖書の普及率は高いが、その割にその贖罪劇としての内容はよく理解されておらず、時として抽象的な理解に終始するというのである。そこで宗教を芸術を通して理解する時、極めて具体的な大衆的な理解が可能となるのである。芸術家は皮相なうわべの観察だけで現象をとらえず、内的な深みから把握してゆく態度をとるからである。さらに宗教と芸術とは共に、人間が画一化されている現在において、人間の独自性を尊重するという性格を共有し、宗教は人間を「それ」としてではなく、常に「あなた」として扱えようとすると言われる。第3には両者共に人間相互に出合いと共感の場を提供し、人間疎外ではなく、相互理解へと導き、第4には宗教の土着化としての宗教芸術の必要性であって、折衷主義(シンクレティズム)は福音と文化とを同じ次元で折衷することであるが、土着化は、土着の文化を媒介として、福音に応答し、文化を通して信仰を表現することであるとしている。同一の福音、信仰が、文化的な多様性を通して表現されるということは、ヨハネ黙示録14・2, 3に世界各国の人々が小羊の周囲に集って新しい歌を歌う場面があり、これらの人々は「神と小羊とにささげられた初穂(来るべき収穫の前ぶれ)である」という意味深い表現があることも指摘されている。

ある神学者によれば、福音と文化とは元来異質的なものであり、この両者を結びつける